パネルディスカッションに向けたアンケートに関する回答について

今回のテーマ「遭難要因」を踏まえ、本アンケートでは、発生数の多い、道迷い・滑落・転倒・疲労に関して現場でどのような登山者の課題が見えてくるか、またそれに対してどのような対策や啓発をしているかを伺いました。39 名からのご意見をいただきました。ありがとうございました。重複する意見や類似の意見も集約して、代表的な指摘、提案を以下にまとめました。また、パネルディスカッションのパネリスト 4 人で、コメントもつけました。

１．体力に不足を感じさせる登山者について、お気づきの点があればお書きください。またそうした登山者に対して行っている啓発等。

（アンケート回答）

〇高齢者が多く、登山開始年齢も壮年期が多い

〇自ら気づくことはなかなか難しいと思うので、家族や周囲の人の協力を得て携帯電話の所持はもちろん、使用方法まで覚えてもらって登山してもらえるといいと思いますし、今後の広報活動を実施していきたい。

〇自分の体力に似合わない登山計画なことがある。

〇少し歩いては立ち止まり「ハアハア」と荒い息をしている方

〇登りで足元ばかり見がちで、対向者の存在にギリギリまで気づかない。他の人より周りが見えていない。

〇登山道の下りで息が上がっている。ザック、靴をしっかり身につけていない。

〇年齢からくる衰えは残念ながらほとんどの人にあるということを御理解いただきたい。

〇歩き方が悪い、トレーニングが不足している。経験が足りない

（講師回答）

技術、装備、加齢など多様な問題から体力不足が発生していること、それらの自己認識が難しいこと、体力不足が他のリスクにつながっていることなどが現場の声から見て取ることができます。

〇自分の体力を知る、具体的には時間あたりの獲得高度を認識することを勧めている。

〇毎月②から③回は、標高差六百メートル登って下りてほしい。

〇無理をしない登山計画、筋トレ(スクワットなど)

○目的の山の標高差をスカイツリーのような身近な建造物に置き換えて体力の必要性を具体的にイメージしてもらうようにしている。

対策については、概ね安藤さんの指摘されたような自己認識、低山での定期的なトレーニング、体力に関する指標の意識などが現場でも意識されていることが分かります。それに加えて、山岳会や仲間単位で「山での体力テスト」などを行なえる機会を作ると良いかと思います。

例えば、「マイペース登高能力測定」はよい方法です。近場で行きやすい山があれば、その山で体力チェックを行うのもお勧めです。

２．転倒・滑落に関する登山者の様子・行動について気になる点、またそうした登山者に対して行っている啓発等。

（アンケート回答）

○スマホを見ながら歩いている。

○バランスが悪くなるのは歳を取っていることの証

○ふとした油断（浮石に気付かない、濡れた木道を無遠慮に歩く）などが直接の原因と思われますが、経験不足や疲労による集中力の低下が遠因のような気がします。

○悪路、一般的に平面の道以外は歩いた経験が足りない。川原などを歩いて悪路歩きを身に着けて

○下山時に多く、筋力不足、体力的に余力のない状況での発生が多い

○知識や危険意識がない登山者も一部見られる

○天気、登山道の質や自分の装備をしっかり確認して集中力が切れてしまうのを前提に注意して登山してもらえればと思います。

○登山に適していないソールの靴での登山

○道迷いからの焦り。　下山時の下半身の疲れ。スニーカー登山。

（講師回答）

富山県の調査にあるようなバランス崩し、スリップ、つまずき、浮石踏み以外にも様々な背景要因が転倒・滑落の背後にはあることが現場では意識されているようです。体力的な面はもちろん、注意力や危険意識のような認知面でも重要性もうかがえます。

対策としては、こちらもトレーニングや焦らず降りるよう指導、また過去の発生場所のマッピングによる公開などが挙げられています。

３．登山者の読図・ナヴィゲーション能力について気になる点、またそうした登山者に対

して行っている啓発等。

（アンケート回答）

〇アプリでは現在地はわかるが、地形図の情報が読めないとその先の状況の危険性まではわからない。

〇オンライン、紙地図に関わらず、等高線の高低差が読めていない。（地図がコースタイムを確認するものになっており、ある意味地図はいらない人たち。）

〇スマホ頼みの方が多い　電池切れによる救助要請対応の経験がある

〇位置情報がオフになっていることがある。

〇高齢者は、機器に加え老眼鏡が必要

〇昔よりは上達していると思います

〇登山者は比較的場所がわかりやすい傾向にあると思いますが、山菜取りの方などは高齢で携帯も持たず、操作方法もわからない方が多いと感じるので、高齢の方にこそGPS などを使用してもらいたいと感じますが課題も多いと思うので、他機関とも連携した広報活動等が必要と思います。

（講師回答）

山地図アプリの中でもコアなファンの多いジオグラフィカの作成者松本さんも、長野県の safety book の中で、地図アプリでできるのは、基本的には現在地の把握で、ルート維持や先読みはできないことを十分意識すべきと指摘しています。またスマホやアプリといったツールの使い方が十分理解できていない様子も報告されています。講演の中でもあった、高齢者がスマホ地図アプリに自信を持っていないといった傾向をある程度裏付ける結果であると考えられます。

〇個人的に勉強会をして同僚に普及活動をしている。

〇紙の地図を持つようにすすめている

〇時々自分の居場所を確認しながら行動する。

〇小学生に戻って、地図の勉強をしましょう。そして、アプリの有効活用に努めましょう。

〇年 3 回の安全登山講習会で、毎回「読図とナビゲーション」を取り入れている。

解決策としては一重に学習機会の重要性が指摘されていました。地図は小学校の社会科でも習っているはずですが、実用に十分なほどの学習は行われていないのが実情です。日常的に地図を持ち、使う意識を持つとともに、紙地図によるルート全体像を把握するマクロな視点と、スマホアプリ等での現在地を把握するミクロな視点の両方を意識することが

重要でしょう。

４．気象状況に関する登山者の様子・行動について気になる点、またそうした登山者に対して行っている啓発等。

（アンケート回答）

〇「せっかく来たから」で進む。悪天候が予想されても「大丈夫だろう」の楽天的に行動する、
〇アルプスこそ早出早着が気象面ではより安全に寄与すると思うが、あまり気にせず
〇意外と遅めに出発する人が多い。
〇ニュースなどで見るが、天気予報を確認しない登山者が一部見られる
〇雨に濡れながら走っているトレランの方
〇気象、天気図についての知識がない
〇午後から雷雨確率が高い山に、入山が遅い登山者
〇天候悪化は非常（想定外）になっている人がいる。

（講師回答）

基本的なところとして、天気図を見ること、それを読むスキルの問題に加えて、天気が不確実性の多い現象であることの理解についても多く指摘がありました。リスクについてのリテラシーが最も重要な領域だと考えられます。

〇気象の急変に対応できない　観天望気
〇天気予報への関心と雲の様子を観察すること。
〇雨具、防寒着、アルミシート、ツェルトの携行

対策としては、講演の中で猪熊さんも指摘していました興味をもって気象現象を見ることの重要性と同時に、悪天候があるのは当たり前として対応できる装備を持つことの重要性が指摘されました。ノルウェーの山の格言に「天気が悪いのではない。お前の装備が悪いのだ」という言葉があるそうです。猪熊さんからは、以下の要点の指摘がありました。
①天気マークや登山指数を確認することよりも気象リスクを想定することが重要
②登山ルートによる気象リスクの違いを認識
③引き返しポイントでの判断が重要